

平成27年度ユネスコスクール年次報告書

報告期間：平成27年4月～平成28年3月

1. 学校概要

学校名 大田区立大森第六中学校

種別 保育園・幼稚園 小学校 小中一貫教育
 中学校 中高一貫教育 高等学校
 教員養成 技術/職業教育
 特別支援学校 その他 ()

所在地 〒145-0063
東京都大田区南千束1-33-1

E-mail om6-i03@educet01.plala.or.jp

We b <http://academic3.plala.or.jp/om6j/>

児童生徒数 男子 206 名 女子 176 名 合計 382 名
児童・生徒の年齢 12歳～15歳

2. 実施活動（複数選択可）

- 地球規模の問題に対する国連システムの理解
- 国際理解
- 世界遺産
- 平和・人権
- 環境
- 気候変動
- 生物多様性
- エネルギー
- 防災
- 食育
- 伝統文化
- そのほか ()

3. 活動内容

1年間の主な活動内容について

平成26・27年度大田区教育委員会教育研究推進校としての研究の機会をいただき、さらに、国立教育政策研究所 教育課程ESD研究指定校としての役割も与えたいいただくことになり、これまでの研究を改めて見直す機会となった。



平成24年3月に国立教育政策研究所より発行された「学校における持続可能な発展のための教育（ESD）に関する研究最終報告書」でESDに関する構成概念として、人を取り巻く環境に関する概念を①多様性、②相互性、③有限性とし、人の意志・行動に関する概念を④公平性、⑤連携性、⑥責任性、をあげ、持続可能な社会づくりの明確な提案があった。

さらに、ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度として①批判的に考える力、②未来像を予測して計画を立てる力、③多面的・総合的に考える力、④コミュニケーションを行う力、⑤他者と協力する態度、⑥つながりを尊重する態度、⑦進んで参加する態度、を挙げている。これらの力や態度が授業研究として具体的に組み込むことができた。



そこで、研究主題として、「ESDの推進及び授業改善」とした。

まず学校内研究組織を再構築することで、校内研究意欲を高めることとした。もともと研究組織はあったものの一部のみが実働している実態を踏まえ、管理職、研究主任、主幹教諭で組織した研究推進委員会を週に1回時間割に組み込むことで、校内全体の研究を活性化させることができた。さらに、月1回の校内研修会では、研究授業を行った後、講師の先生を招き協議会を開いた。

校内研修では、常に全教科の教員が3つに分かれ研修を進めてきた。生徒に身につけさせたい力や態度を育てるために年度初めに教師向けアンケートを取り、7つのESDで身につけさせたい能力・態度を集約し、3つに分類し、分科会のテーマとした。

ESDの視点に立った学習指導で重視する7つの能力・態度を検討し、「批判的に考える力」、「未来を予測して計画を立てる力」、「多面的総合的に考える力」を身に付けるためには、思考力を育てなければならない。また、「批判的に考える力」、「未来を予測して計画を立てる力」、「多面的総合的に考える力」との関連を図ることで、「コミュニケーションを行う力」は高まると考える。さらに「他者と協力する態度」「つながりを尊重する態度」「進んで参加する態度」は、持続可能な社会の担い手として必要である。

そこで、「思考力分科会」「コミュニケーション分科会」「ESDの態度分科会」と名づけ、研修を進めた。

また、移動方法として、アクティブ・ラーニングを取り入れ、授業を展開することにした。

次期学習指導要領では、育成すべき資質・能力について

「知識・技能」

「思考力・判断力・表現力 等」

「主体的に学習に取り組む態度」

の3要素を出発点として、3つの柱で整理していくことになると考えられる。

① 「何を知っているか、何ができるか(個別の知識・技能)

② 「知っていること・できることをどう使うか(思考力・判断力・表現力等)」

③ 「どのように社会・世界と関わり、より良い人生を送るか(人間性や学びに向かう力等)」

そこで、学習活動の示し方や意義等が、課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学びいわゆる「アクティブ・ラーニング」の手法にある。

学び全体の改善として、

I Process (プロセス)

習得・活用・探究という学習プロセスのなかで問題発見・解決を念頭に置きつつ、深い学びの過程が実現できているかどうか。

上記①～③に示す力が総合的に活用・発揮される場面が設定されることが重要である。

II Interactive (相互交流)

他者との協働や外界の情報との相互作用を通じて、自らの考えを広げ深める、対話的な学びの過程が実現できているかどうか多様な表現を通じて、教師と生徒、生徒と生徒が対話し、それによって思考を広げ深める。

Ⅲ Reflection (省察)

子供たちが見通しを持って粘り強く取り組み、自らの学習活動を振り返って次につなげる、主体的な学びの過程が実現できているかどうか。ⅠからⅢの要素を授業に組み入れていくことで、授業が改善され、「思考力」「コミュニケーション」「ESDで育てる態度」を育てることにつながるようになる考えた。

さらに、授業の始めにどのような課題を生徒に持たせるかが重要で、課題設定、あるいは生徒に投げかける問いを工夫することが、授業改善の鍵になった。

「思考力分科会」

本分科会では、思考力を以下の3つの力に分類してみた。

- ① 「批判的に考える力」：課題解決の方法は、一つだけではないことを意識し、他者の考え（解決法）や、自分の考え（解決法）を協働して吟味し、より良い解決法を見いだしていく力
- ② 「未来像を予想して計画を立てる力」：より良い未来像（課題の解決結果）を共有化し、それに向けて、どのようなスキル、ステップが必要かを考え実行していく力
- ③ 「多面的、総合的に考える力」：情報を他者と共有しながら、互いの考え方の共通点や、相違点を理解し、共感したり、統合したりしながら課題を解決する力

三つの「考える力」を生徒につけさせていく上で、重要なポイントは以下の3点であると考えられる。

- ・その授業において、どの力を伸ばすことをねらいとしているのかを明確にすること。
- ・そのねらいに適した授業形態を研究すること特に、**アクティブ・ラーニング**に積極的に取り組むこと。
- ・どのような授業形態をとる場合でも、ESDで重視する態度（他者との協働、つながりの尊重、主体的な参加）が意識され、生徒が主体的に学ぶ授業づくりが行われていなければならないこと。

「コミュニケーション分科会」

研究対象を、次の五つの能力と考えた。

- ①発想力・・・課題に対し自分の考えを持ち、伝えたいことをしっかり持つ。
- ②論理力・・・相手に自分の考えをしっかりと伝えるために、根拠を示しながら相手に伝わるような言葉や態度で表現する。
- ③聞く力・・・相手の意見をしっかりと聞き取り、相手の言いたいことを認める。
- ④批判的思考力・・・相手の意見を聞き、それをもとにさらに自分の意見を構築する。
- ⑤コミュニケーションを行う力・・・①～④の力を駆使し、相手が誰であろうと自分の意見を伝え、相手の意見を聞き、やりとりができる。

コミュニケーション分科会ではこれらの能力を授業の中で育てていくための方策を探ってきた。課題解決のためにコミュニケーションを使う機会や活動を授業の中に意図的・計画的に設定する必要がある。五つの力を育てるためには様々な形態で取り組むことが有効であると考えた。例えば、話し合い、討論会、ディベート、ゲーム、スピーチ発表、ペア活動、グループディスカッションなどである。そして、これらを授業の中で取り入れ、お互いの授業を見て、振り返りを行ってきた。コミュニケーションという共通の視点があることで、教科を超えてお互い意見を出すことでより良い方法を見つけることもできた。

「ESDで育てる態度分科会」

ユネスコスクールとして、ESDで育む態度を「平和」を中心にとらえさせた。各教科内で「平和」を扱う単元をクロスカリキュラム表にまとめた。平和をテーマに扱う教科単元は、数多くあるが、実際に「平和」を扱っていく方法として、教科をこえた「横断的学習」を実践していくことが有効ではないかと考え、研究授業も行い、良い成果を上げることもできた。

「ESDで育てる態度」分科会では、教員メンバーによるそれぞれの担当教科のカリキュラムについての「話し合い」の時間を積極的にとり、教科間の関連を生みやすい内容に関しては、物理的、時間的に同じ教室に教師がいなくても、限りなく「横断的学習」に近い授業が実践で

きるような試みを実践した。そのために、クロスカリキュラム表は有効であると考えられた。

また、生徒は平和を考える際に、戦争と関連付けやすいので、身近な問題からも考えることができるように、さまざまなアプローチを考えることができるようにするためにも、クロスカリキュラムは有効であると考えた。

分科会の成果と課題

これまでの取り組みの成果として次のようなことが挙げられる。

①1時間ごとの学習課題の明確化

課題解決型の学習を進めて行くにあたって、毎時間の学習課題を明確にした授業を行ってきた。これによって、生徒の意識も、単なる知識の獲得から授業における課題解決へと変化しつつある。

②学習形態の多様化ー生徒同士の学び合い

話し合い活動などの協働学習を重視した取り組みがなされることにより、教師からの一方的な知識の伝達ではない、生徒同士の学び合いの場面が多く見られるようになった。

③考え（予測し）やってみてまた考える

特に実技教科において、言われたことをやってみるのではなく、「こうしたらどんな結果が得られるか」を考えてから実技を行う授業の展開ができてきた。

④発想力・批判的思考力の向上

他者の意見を参考にさらに自分の意見を振り返り、共感したり批判したりしながら考えを深めることができるようになった。

⑤表現力の向上

分科会の中でいくつかの教科でコミュニケーションを積極的に行う授業を行い、他の教科でその力を活かすことができた。よい発表はクラス全体の表現力を向上させることができる。

⑥人間関係の構築

どのようなグループでも話し合い活動ができるようになった。司会、リーダーを決めなくても、様々な人数のグループでもスムーズに話し合いをすることができる。コミュニケーションをとる活動をすることで相手を尊重することができ、より良い人間関係を作ることができるようになった。

⑦自己肯定感・達成感

課題に対しコミュニケーションをとることで自分の考えを深め、さらにそれを表現できることで自己肯定感が高まり、達成感を感じるようになった。また自分の意見が他者に認められると自信になり、さらに堂々と意見を言えるようになった。

⑧E S Dの視点を導入した成果

話し合い活動の手法を用いたことによって、「進んで参加する態度」で授業に参加する生徒は多く見られた。また、話し合いで出た意見のなかには「他者と協力する態度」や「つながりを尊重する態度」を取り入れて考えられている内容のものもあり、それらの意見を共有することもできた。

「E S Dの評価」

授業の中で生徒をどう評価していくか。生徒の変容を見るために、全校生徒にアンケートをとり、各授業でポートフォリオを進めた。

アンケートではE S Dで構築される概念形成を中心に聞いた。アンケート 20 項目中、13 項目において肯定的割合が80%を超えた。

各授業でのポートフォリオしていく中で、自分の考えが、「自分の中ではわかっているけど、自分の意見を言うことができた。」「ヒトの意見を聞きいろいろな考えがあることがわかった。」「もっと勉強してみたい。」と、変化していく変容ぶりが見えてきた。

自分の意見を持ち、相手の言うことを理解し、未来を予測し、さらに考えを深め、自分の意見を相手に伝える。この段階を全ての授業で進めていると、生徒の力は大きく向上し、人前で自分の意見を発表することが抵抗無くできるようになってきている。

最後に



これまでの研究の中で、ユネスコの理念に沿った教育が、確実に人格を育て、学力向上につながっていると思われる。
持続可能な社会の担い手づくりを意識して行ってきたこの5年間で生徒は、地域を大切に思い、世界のことを考え、実行できる生徒に成長していると考えます。

OECDが発表した、キーコンピテンシーにおいてもESDでうたっている7つの力と態度が重要であることがわかる。

ESDが特別なことをしているわけではない。本来の知識や技能をしっかりと身につける。その上で、能動的に主体的に思考を深め、表現力を高め、正しい判断をしていくことが、今後の社会を担う人として求められている。さらに、欠かせないことは、思いやりをもち、すすんで行う態度、つながりを尊重する態度を培うことが、持続可能な社会の担い手として絶対的に必要であることを確信している。

(2) 活動時間について（下記から選択して下さい。）

- 通常の授業時間を使用（総合的な学習の時間を含む）
- 時間外活動の時間を使用
- ユネスコクラブの活動として実施
- その他（

）